

2023年 8月 23日

2022年度「市民防災・減災活動公募助成」事業実施報告書

団体名 見てもようよ！常総市の会

代表者・役職名 氏名 代表 染谷みどり

▼報告書の扱い、および記入にあたっての注意点

この報告書(精算報告書以外)は、ホームページなどで公開する予定ですので、広く読まれることを想定してご記入ください。また、編集段階で、表記・表現等を事務局で編集する場合がありますので、あらかじめご了承ください。語尾の表現は「です・ます」調をお願いします。報告書に掲載するため活動の内容がよくわかる写真(2枚程度。写真の肖像権問題がないものの提出をお願い致します)を添付して下さい。

1. 助成プロジェクト名

水害の記憶を未来につなぐ映像制作

2. 団体の概要(創設の経緯、創設時期=法人で、法人化前に任意団体での活動がある場合、その段階からご記入ください。会員数など。180文字程度まで)

平成27年関東東北豪雨災害の翌年に安全なまちづくりを考えるワークショップに集まった有志が水害記憶継承を目的に団体を設立、街中の施設に洪水水位高を示すステッカーを施設オーナーの了解を得た上で貼って歩きながらその方を語り部にお話をきき『ステッカーツアー』を開始しました。その後も『復興まちあるきツアー』や『川を知るカヌー教室』など様々な水害伝承企画を実施してきています。

3. プロジェクトの目的とその背景(※応募申請書に記載のものでも可) 250文字程度まで

平成27年(2015年)9月の関東東北豪雨で市内を流れる鬼怒川堤防が決壊、市中が水に浸かる大水害を受けた常総市において、水害の記憶を風化させず、“川とともに生きる”まちの歴史と文化を掘り下げながら、防災啓蒙を市民の手で進めていくという団体設立当初の目的は変わりません。水害後既に8年が経過し被災者の高齢化と記憶の風化が進みつつあり、被災者の証言を映像・アーカイブ化し、次世代に“水害のリアル”を伝えていくことが今必要と考えています。

4. プロジェクトの内容(※当初予定と変更がない場合は、応募申請書に記載のものでも可) 300文字程度まで

水害7年後の街の様子とともに被災者に当時の思い出を証言していただく記録映像を作成し将来的に整備するHPにリンクさせたかたちでYOUTUBE公開することで、水害記憶の伝承を図ります。水害記憶証言は、市井の人々にリアルな被災体験の証言を依頼するほか、災害後対応や復興に当たった様々な立場の方々にもその仕事における当時の状況を証言いただきます。最終的には、これら証言を集め編集した映像作品(DVD)を制作します。

5. プロジェクトの実施で得られた「結果」(OUTPUT。実施回数や参加者数など)、「成果」(OUTCOME。事業によって生まれた直接的な変化)、「社会的な変化」(IMPACT。事業が社会に与えた影響)などの『効果』 300文字程度まで

映像証言収集の2年度目にあたる令和4年度は、これまでの個人的な被災体験の掘り起こしだけでなく、当時区長をしていたお宅におけるボランティア受入協力の状況、現地NPOとして継続的な復興支援にあたってきた方の証言、市内唯一の公共交通機関・関東鉄道常総線の鉄道マンの対応、復興支援に尽力した市役所職員の証言など、水害をより多面的な角度からとらえ、その被災・復興状況を立体的につかみ取れるような映像証言作品化することができました。このこと自体で大きな社会的変化を望むことはできませんが、映像証言に、行政や公共交通機関に協力いただけたことで、今後計画しているのアーカイブ化に向けて、今まで以上に広範な協力

を得ることができる状況になってきました。これにより、上映会を実施した場合、より広がりのある効果を生むことができると思っています。

6. プロジェクト実施にあたっての課題、今後の展望など 300文字まで

課題としては、他の欄にも記載したように水害後時を経るにつれて、被災者の高齢化が進み、記憶が風化していく「時間との闘い」にさらされていることが挙げられます。伝承活動全般に言えることですが、リアルな痕跡や記憶が薄れていくこと、過去の災害への関心が薄らいでいくことを同調させないことの難しさの増大に直面しています。今後の展望としては、撮影した証言映像の上映会を実施するとともに、令和5年9月に実施される「ぼうさい国体」に参加の機会を得られたことから、こうした映像を活用し、市内外の関心をさらに高め、運動の継続を図りたいと思います。

7. 参考資料：プロジェクトで作成したチラシ、パンフレットやマスコミで紹介された記事等の現物またはコピー、活動状況の写真などを、“必ず”、別途、ご提供ください。



元区長奥様証言風



取材途中で案内されたお宅に残る揚げ舟

関東鉄道常総線職員証言風景